©日本記者クラブ 2020

日本記者クラブ会報

公益社団法人　日本記者クラブ　〒100－0011　東京都千代田区内幸町2－2－1　日本プレスセンタービル　TEL. 03－3503－2722　https://www.jnpc.or.jp/

〝仕事師〟菅内閣スタート



菅内閣が9月16日に発足。初閣議を終え、記念撮影に臨む菅義偉首相（手前中央）ら＝首相官邸
撮影：武居　雅紀（共同通信社写真部）

多数の政治家がゲストで登壇
「リアル会見」の魅力再認識

久々に首相が代わった「政治の季節」らしく、9月は多くの政治家がクラブ会見に登場した。

なかでも注目されたのは、事実上の首相を選ぶ自民党総裁選の候補者討論会だった。NHKで全国中継され、翌日の新聞も詳報した。

6月の都知事選候補者討論会はリモートで実施したが、今回は候補者が来場してのリアル討論会となった。代表質問団とのやりとりでは、本命の菅義偉候補が外交分野での経験不足について問われ、「何もやってないわけではない」と珍しく感情をあらわに反発した。これは、「リアル」ならではの場面だった。

このほか、「合流新党」代表選では枝野幸男、泉健太両候補が一騎打ちの論戦を展開し、大阪の吉村洋文知事、松井一郎市長は「東京で都構想を発信したい」と日帰り出張での会見となった。若手政治家シリーズでは武井俊輔議員（自民）が、持参した筑紫哲也さん自筆の「多事争論」の色紙を掲げて「リベラル保守」をアピールした。

「ウィズコロナ」の時代で、ゲストがウェブを通じて登場する会見も増えてきた。「距離の壁」が消えた利点もある。しかし、ナマミのゲストが、目の前にいる記者たちに語りかけ、質疑に応じる「リアル会見」の魅力を、一連の政治家会見を通じて再認識した。

菅首相をはじめ閣僚の皆さん、霞が関の隣町でお待ちしています。

（専務理事　土生修一）

歌舞伎役者で初の単独登壇
十代目松本幸四郎さん

9月15日、コロナ関連で異例のゲストが登壇した。十代目松本幸四郎さん(47)だ。

幸四郎さんは、「コロナの時代に歌舞伎はどうやって生き残っていくのか」を熱く語った。

日本記者クラブ半世紀の歴史で、歌舞伎役者の登壇は、2013年3月の中村吉右衛門さん、14年5月の中村梅玉さんと2度あるが、いずれも歌舞伎座建て替えがテーマで松竹幹部も同席しての会見だった。歌舞伎役者が単独ゲストとして登場するのは今回が初めて。

緊急事態宣言で自粛中は、自宅で何もしない日が続いた。「最初は、お芝居の勉強をする気にもならず、歌舞伎がなくなってしまう夢もみました」と振り返る。



吉右衛門、梅玉の両先輩の揮毫を前に筆を運ぶ松本幸四郎さん

8月に歌舞伎座が再開、切られ与三郎役を演じて久々に花道を進むと三味線の音も聞こえなくなるほどのすごい拍手が起こった。大向こう(客の掛け声)は禁止されているが、「花道で振り向いて客席を見ると、『高麗屋』(幸四郎さんの屋号)と書いた紙を両手で掲げているお客さんが見えた。これには感激しましたね」と語った。しかし、すぐに「あっ、でもお客さんがみんなこれをやると困ってしまうので、もうやらないでくださいね」とフォロー、記者席から笑いが起きた。

感染防止のため役者同士が接触できないので演出も工夫している。男女の別れの場面では、これまでの抱き合う演技の代わりに、手拭いを女役の相手に巻き付けて「おまえを離しはしねえよ」とセリフをいう演出に変更したという。

動画配信も含め新しい形の歌舞伎を自分たちの世代が作っていく、という気迫が十分伝わってきたクラブでの「初舞台」だった。

都構想で知事、市長が共同会見

大阪府の吉村洋文知事と大阪市の松井一郎市長の共同会見が9月23日に行われた。

日本維新の会から7月末に「知事、市長の2人が、大阪都構想について説明する会見を日本記者クラブで行いたい」との申し入れがあり、実現した。松井市長は控室で「東京で記者会見すれば全国に情報発信できるから」とクラブでの会見申し入れの理由を語った。

2人の共同会見は、昨年5月の当選直後に続き2回目。今回は、日本記者クラブの会見だけのために、日帰りでの公務出張となった。

松井市長は、「府や市の広報で都構想の説明をするのはおかしいとの意見がある。しかし、私たちは知事、市長を入れ替えてまで都構想を第一の公約に掲げて昨春の知事選、市長選を戦い、当選した。その結果として、都構想実現は、府や市の役所にとってもミッションとなっている」と、都構想推進と公務との関係を説明した。

同僚議員感染で稲田氏の会見延期

自民党の稲田朋美衆議院議員の会見が9月23日に予定されていたが、新型コロナウイルスへの感染が判明した自民党の髙鳥修一前筆頭副幹事長と接触があったため稲田議員が自宅待機となり、会見は延期となった。

目次

▼会見リポート 3〜7
杜若政彦 イオン(湖北)総経理、南慎一郎 イオンモール(湖北)総経理／秋元諭宏 笹川平和財団米国会長兼理事長／十代目松本幸四郎氏／吉村洋文 大阪府知事、松井一郎 大阪市長／武井俊輔 衆議院議員(自由民主党)／高坂晶子 日本総合研究所主任研究員／石田一喜 農林中金総合研究所主事研究員／医療提供体制についての緊急提言／高橋和夫 放送大学名誉教授／リチャード・コート 駐日オーストラリア大使
▼自民党総裁選立候補者討論会 8〜9
▼「合流新党」代表選立候補者討論会 10
▼ワーキングプレス 11〜14
安倍首相電撃辞任 朝日新聞社 星野典久
米国 BLM運動 テレビ朝日 猪ノ口克司朗
中国のコロナ水際対策体験 西日本新聞社 坂本信博
池江璃花子選手復帰 報知新聞社 太田倫
▼新・列島報告 北海道 15
「核のごみ」処分場問題 北海道新聞社 安本浩之
▼書いた話書かなかった話 16〜17
「唯一の好機」、92年の日露領土交渉 名越健郎
▼リレーエッセー 18
ドラマ「大地の子」養父役・朱旭さん 読売新聞社 五十嵐文
▼「戦後75年 いま想うこと」 19
藤原作弥
▼記者ゼミ 20
▼試写会「靴ひも」 21
▼マイBOOKマイPR 21
▼写真回廊 24

9月のクラブゲスト

下記のゲストの会見リポートは
3～7ページに掲載しています

杜若　政彦　イオン（湖北）総経理
南　慎一郎　イオンモール（湖北）総経理

■9・8（火）「新型コロナウイルス」㊶そのとき武漢は　両氏オンライン登壇／司会：藤賀三雄委員／出席：会場17人、オンライン54人

秋元　諭宏　笹川平和財団米国 会長兼理事長（オンライン登壇）

■9・10（木）「米大統領選の行方」⑥激動する米国と日米関係／司会：杉田弘毅委員／出席：会場22人、オンライン80人

十代目　松本幸四郎　歌舞伎役者

■9・15（火）「新型コロナウイルス」㊷歌舞伎はいま／司会：中村正子委員／出席：会場35人、オンライン40人

吉村　洋文　大阪府知事
松井　一郎　大阪市長

■9・23（水）「大阪都構想」共同会見／司会：坪井ゆづる委員／出席：会場48人、オンライン59人

武井　俊輔　衆議院議員（自由民主党）

■9・24（木）「次の10年　若手政治家に問う」⑥／司会：川上高志委員／出席：会場14人、オンライン20人

高坂　晶子　日本総合研究所主任研究員

■9・17（木）「新型コロナウイルス」㊸観光再生への道／司会：小林伸年委員／出席：会場16人、オンライン43人

石田　一喜　農林中金総合研究所主事研究員

■9・24（木）「新型コロナウイルス」㊹コロナが変える農業／司会：竹田忠委員／出席：会場8人、オンライン30人

医療提供体制についての緊急提言
小宮山　宏　元東京大学総長、三菱総合研究所理事長
小林　慶一郎　東京財団政策研究所研究主幹
井伊　雅子　一橋大学国際・公共政策大学院教授
大橋　博樹　多摩ファミリークリニック院長
湯﨑　英彦　広島県知事

■9・25（金）「新型コロナウイルス」㊺　各氏オンライン登壇／司会：猪熊律子委員／出席：会場6人、オンライン81人

高橋　和夫　放送大学名誉教授

■9・25（金）「アメリカ大統領選挙と中東」／司会：出川展恒委員／出席：会場18人、オンライン30人

リチャード・コート　駐日オーストラリア大使

■9・30（水）記者会見／司会：土生修一日本記者クラブ専務理事／通訳：池田薫／出席：会場20人、オンライン21人

「新型コロナウイルス」㊶

杜若　政彦　イオン（湖北）総経理
南　慎一郎　イオンモール（湖北）総経理

9月8日

武漢に残り市民生活支える





新型コロナウイルスの最初の感染爆発が起きた中国湖北省武漢市は、1月23日から約2カ月半にわたり都市封鎖された。日本人がチャーター機などで帰国する中、武漢にとどまり市民生活を支え続けた駐在員がいる。イオンの現地の総経理（社長）を務める南慎一郎さん（46　左）と杜若政彦さん（51）がオンラインで当時の状況を振り返った。

漢口駅に近い海鮮市場で多くの人が肺炎に感染したという情報が入り始めたのは昨年12月31日。一部の商品をここから仕入れていたが、商品を除き、従業員の検温やマスク、手袋の着用を徹底した。

新型コロナ

情報不足のまま都市封鎖が始まった。食品などを求め客足が急増。従業員も不安を抱える中、手探りの取り組みが始まった。

そんな中、困難を乗り切るには従業員との信頼関係が不可欠だった。SNSで従業員にこんなメッセージを発した。「毎日営業を続けます。従業員の安全と生活を第一に考えます。武漢の人と一緒に困難な状況に立ち向かいましょう。ぜひ力を貸してください」

従業員らの現場からのアイデアをもとに、店内で距離を置く工夫や、セット販売にするなど効率よく顧客に商品を届ける方法を考え出した。2月以降は都市封鎖がさらに強化されて商品が減る中、中国国内のイオングループの連携で商品を調達。特別に当局から許可を得て検問を通り抜け、不足しがちな生鮮食品や麺、小麦粉を市民に届け続けた。

混乱の中、強さを発揮したのがキャッシュレスの普及だ。既に約7割が利用していたが、人員や業務の効率化に役立った。

感染リスクもあった中で業務に携わった困難は想像するに余りある。「一緒に仕事をする仲間を見捨てることはできず、残ることにした」。こうした言葉から、武漢の日系企業の存在感や確かな使命感が伝わってきた。

毎日新聞上海支局長　工藤　哲

「米大統領選の行方」⑥

秋元　諭宏　笹川平和財団米国会長兼理事長

9月10日

異例づくしの米大統領選



民主・共和両党の党大会が終わり終盤戦へ、という時期にご登壇願ったのが、ワシントン在住の秋元諭宏さん。1988年から大統領選を見続けている秋元さんをしても「今回ほど異例づくしの大統領選はない」と言わしめるほど、何が起きるか分からない。トランプという現職候補の特異性に加え、コロナ禍、経済急停止、オンライン選挙、郵便投票の広範な実施と、確かに「異例」満載だ。

選挙情勢について秋元さんは、激戦州の情勢などを基に、「バイデン優勢の中でトランプが挽回をはかり差が縮まってはいるが、逆転に向け弾みがついたとまでは言えない」と分析。また、郵便投票がすでに始まっていることも指摘、逆転へのハードルが上がっていることも示唆した。

その郵便投票こそが最も読めないところ。トランプ氏によれば、約8000万人が郵便投票をする可能性があるということで、正確に郵便事業が機能するのか、いつ開封を始めるのか、いつの到着まで待つのかと、各地で規則が異なり、文句をつけようと思えばキリがないという。ミシガン州など前回僅差でトランプが勝った激戦州で、その結果を巡って次々に訴訟が起こされると、最終的には連邦最高裁が決着をつけるという可能性も十分あり得るとの見方を示した。

投票所でのリアル投票は共和党が、郵便投票では民主党が優位との見方があり、リアルの開票でトランプが僅差で上回り勝利宣言するものの、その後の郵便投票の開票でバイデンが逆転するというケースになれば、トランプ大統領がすんなり負けを認めず、ホワイトハウスに居座る可能性だって否定できないという。

長らく大手商社のワシントン事務所長を務められ、現地の方々とリアルな交流を続けている秋元さんの分析は客観的で説得力を持つものばかりだった。今後の選挙戦を左右するものは？との問いに、感染拡大を挙げつつ「候補者が感染することだってあり得ないわけじゃない」。10月2日、トランプ大統領の感染が明らかになった。確かに異例づくしの大統領選だ。

企画委員　TBSテレビ解説・専門記者室長　播摩　卓士

「新型コロナウイルス」㊷

十代目　松本幸四郎　氏

9月15日

動画配信「図夢歌舞伎」に挑戦



新型コロナ

コロナ禍は舞台芸術・古典芸能の世界にも大きな打撃を与えている。8月から5カ月ぶりに再開された東京・歌舞伎座に2カ月続けて出演中の松本幸四郎さんが、歌舞伎界の現状とこれからの課題を語った。

歌舞伎座は3～7月の公演が中止となり、「十三代目市川團十郎白猿襲名披露興行」（5～7月）は延期された。幸四郎さんらは3月歌舞伎座公演を無観客で映像収録して無料配信。4月には香川・金丸座で予定されていた父・二代目白鸚さんと自身の襲名披露公演が中止された。

ステイホーム中には「舞台がないと役者は何もできない」と無力感に襲われたこともあったが、「生で演じるのを見てもらうことはできる」と、Zoomに着想を得た「図夢歌舞伎」を発案。「仮名手本忠臣蔵」を再構成し、5回にわたって有料生配信した。大道具、小道具、衣装、床山、音響といった職人たちに歌舞伎は支えられていると説明。彼らが技を鈍らせぬよう、手を動かせる場を維持することも考えたという。

「環境が変わる中、待っているだけでは歌舞伎はなくなる」との危機感から配信作品に挑んだが、他の演劇でも配信が盛んになっている状況を踏まえ、「日常に入り込んでいる配信の中に歌舞伎というジャンルがあることが必要だと思う」と、今後も続けていく意向を示した。

再開後の歌舞伎座は感染防止のため、1808席のうち823席を販売。大向こうのかけ声も禁止だ。前例のない4部制をとり、約1時間の演目を1本上演し、俳優やスタッフは各部ごとに入れ替わる。厳しい制約下での興行が続くが、「400年以上の歴史には不安な時代もあったが、歌舞伎は生き続けた。必要なものだと思われるようにするのが歌舞伎役者の使命です」と語り、演出や上演時の工夫にも言及。中堅世代のリーダーとして、歌舞伎界を支える責任感が言葉の端々ににじんだ。

朝日新聞社編集委員　藤谷　浩二

「大阪都構想」共同会見

吉村　洋文　大阪府知事
松井　一郎　大阪市長

9月23日





「都構想の住民投票、負けたらそこで政治家として終了」

会見で松井大阪市長（左）が政治家としての進退を明言。約1時間後の関西ローカルのトップ項目で放送した。

政令市の大阪市を廃止して4つの特別区に分割する「大阪都構想」。記者会見は11月1日に予定されている住民投票の約40日前に開かれた。関西では注目のニュースで、吉村・松井両氏の顔を見ない日はないほどである。一方、私が出演している夕方ニュース「報道ランナー」で東京から来ているコメンテーターに話を聞いても興味を持ちにくい話題のようで、東京でどれほどの関心があるのかを気にしながらの参加となった。実際、松井市長が「天王寺には、新しい拠点として支持されている『てんしば（天王寺公園内の芝生の広場）』エリアなどがあります」など各特別区の特色を説明している時の会場の様子を見ていたが、数人の記者はメモを取る手が止まっているようにも見えた。会見後半の質疑応答でも、手を挙げるのは在阪各社の記者ばかり。司会者が、「在京記者の方」と質問者を限定するような場面もあった。

日本の中心で「大阪都」を叫ぶ



「橋下商店」から「吉村・松井商店」へ

前回の投票は橋下徹氏が前面に出たため、ある意味「橋下支持か、不支持か」が問われる形となった。あれから5年…市営地下鉄の民営化や万博の誘致など維新の知事・市長によって目に見える成果を上げ、大阪では「改革」が進んだと一定の評価がある。特に、今年に入ってコロナ禍での吉村人気は絶大で、吉村知事が生出演すると視聴率が数ポイントアップする「吉村効果」が出るほどだ。「橋下商店」だった維新が、この5年で「松井・吉村商店」になり、コロナを経て「吉村・松井商店」に変貌しつつあるようで、この2人に対する「支持か、不支持か」が住民投票の結果を左右する要因になりそうだ。

私は大阪から上京してきたという気負いから早々に質問に立ち、「インバウンド、IRなど海外からの渡航者頼みの成長戦略では、今回のコロナのような感染症が発生すると立ち行かなくなる。別の一手はあるのか？」と聞いた。すると、松井市長は大阪万博のテーマ「ライフサイエンス」を挙げ、創薬や再生医療などが「次の一手」だと切り返し、長々と万博のPRをされてしまった。松井氏の近著にもあった内容そのままで、予想された答えだっただけに自分の「質問力不足」を反省したほろ苦い会見となった…。

関西テレビ放送報道センター　神崎　博

次の10年　若手政治家に問う



武井　俊輔
衆議院議員
（自由民主党）
⑥9月24日

「保守中道の政治を実現したい」

安倍政権7年8カ月で自民党内では絶滅危惧種になった「保守中道」を自任する。ツイッターでの発信が得意なのだが、悩みの種はしばしば炎上することだ。8月15日に靖国神社に参拝したと発信すると、リベラル派から「見損なった」と非難を浴びる。日韓議連で韓国を訪問したら、右派から「売国奴」と叩かれたという。「保守中道は費用対効果が悪い」「虚無感がある」と嘆く。

父は新聞記者で、バス会社の社員から無所属の県議を経て、衆院議員に。「正直に生きる人がバカを見るようなことがあってはならない」と政治の道を志した。宏池会入りは「保守中道の政治を実現するため」と話す。

派閥を率いる岸田文雄前政調会長を首相にと動く。個性の強さが足りないのかと思案し、「衆院の300小選挙区すべてで、せめて一人のファンを作ろう」と訴えている。

時事通信・朝日新聞出身　脇　正太郎

「新型コロナウイルス」㊸

高坂　晶子

日本総合研究所 主任研究員

9月17日

観光施策、「量から質」へ転換を



高坂氏は新型コロナウイルス禍を好機と捉え、「量から質」の観光施策へ転換を目指すべきだと訴える。

安倍政権では訪日誘客を成功させた一方、一部の観光地で環境整備が追いつかないほど人が押し寄せ弊害も起きた。高坂氏はデジタル基盤の整備と同時に、収益性を高める工夫も大切だと指摘。旅行者が旅先の住生活に配慮する「レスポンシブル・ツーリズム」の浸透も図るべきだという。

菅義偉新首相は早々に、2030年に訪日客を6千万人とする従来目標の維持を決定。一方コロナ禍を受け、「新しい旅のスタイルを確立する」とも掲げるが、施策方針は変化に乏しく、具体性を欠いている。

「数を掲げるだけでは新しい旅とは言えない」―。図らずも総裁選直後に開かれた高坂氏の会見は、数を追う行き方を続ける新政権に、早くも課題を突きつける形となった。

共同通信社地域報道部　大平　和生

観光

「新型コロナウイルス」㊹

石田　一喜

農林中金総合研究所主事研究員

9月24日

農業者自身の変革必要



新型コロナウイルス禍は人手不足など日本農業の構造問題をあらわにした。農業の課題と生き残り策を提示するタイムリーな会見だった。

専門は農業経済学。気鋭の研究者らしく、農業の現在地をデータと実例で解説。コロナ禍が生産・流通・消費にもたらした変化をつかみ、「解」へと導く。多様な支え手の育成、変わる消費動向への対応、農業者自身の変革の必要性を説いた。

石田さんは「国産への関心の高まり」を生産者が戦略的に取り込むことを提起した。人手不足対策では、外国人材依存の危うさと共生の課題に言及。国内では「就労支援・他産業との連携」「スマート農業の実装」を促した。

ヒト、モノの流れが止まる不測の事態に備え、持続可能な生産・流通の仕組みをどう構築するか。食料安全保障の在り方も含め、さらなる論考に期待したい。

日本農業新聞論説委員　緒方　大造

農業

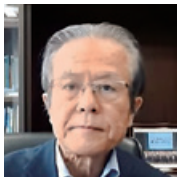
新型コロナ

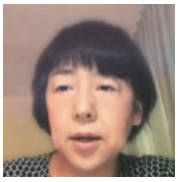
「新型コロナウイルス」㊺

医療提供体制についての緊急提言

9月25日

検査体制増強など6項目提案







新型コロナウイルス感染症で、秋冬シーズンに感染者が急増し、医療体制が逼迫することが心配されている。しかし、不安だからとむやみに外出を自粛したり、過剰な対策を連発したりするだけでは、経済への影響は甚大となる。三菱総合研究所の小宮山宏理事長（右）を座長とする「コロナ危機下の医療提供体制と医療機関の経営問題についての研究会」は、このような問題意識から緊急提言をまとめた。

提言は、医療関係者、経済学者、工学者ら異分野の有識者が議論を重ね、まとめられた。会見で、井伊雅子・一橋大教授（中）は、2～6月に新型コロナ感染者の入院を受け入れた病院は約6割で、受け入れた病院の一般病棟稼働率は5月段階で約62％にとどまったとの調査結果を明らかにし、「必ずしも逼迫していた状況とは言えない」と指摘した。一方で、受け入れ病院では非受け入れ病院よりも収益の悪化が大きく、「積極的な財政支援が必要」と強調した。

研究会の提言は6項目からなり、①医療機関の集約化・役割分担・連携②診療所などの活用③医療機関へのメリハリのある財政支援④検査体制の増強⑤高リスク者を重点的に守る⑥正確な情報発信と感染者への偏見・差別・社会的非難の防止――を挙げている。提言では、感染が拡大し、行動抑制の強化が必要になった場合でも、広範な自粛・休業ではなく、特にリスクの高い場所や業種に絞り込むよう求めた。

経済学者の小林慶一郎・東京財団政策研究所研究主幹（左）は、「接触確認アプリの普及が7～8割を超えれば、流行の封じ込めが可能」と述べ、アプリ普及強化やデジタル技術の活用を訴えた。

日本はこれまで、欧米に比べ感染者数、死者数とも低く抑えられている。科学的分析を深め、合理的で将来誇れる新型コロナ対策の「日本モデル」の構築が求められる。

読売新聞社科学部　木村　達矢

「アメリカ大統領選挙と中東」
高橋　和夫　放送大学名誉教授　9月25日
米内政から中東情勢を読む



不倶戴天の敵だったイスラエルとアラブ諸国の国交正常化。イランの核開発を巡る緊張の高まり―。11月の大統領選を控えた米内政の文脈から、激動する中東情勢を読み解き、縦横に語り尽くした。

高橋さんによると、米政治を理解する上で、重要な数字が3つある。キリスト教保守派（福音派）が人口の4分の1を占め、うち4分の3は白人で、その8割が4年前、トランプ氏に投票したことだ。

米国の人口は3億2千万余りだから、約4800万人の福音派がトランプ氏を支持し、大統領の座に押し上げたことになる。同派をつなぎ留めることが「再選の必要不可欠の条件」と解説した。

福音派は聖書を絶対視する。1948年のイスラエル建国は、滅亡した古代王国がよみがえり、聖書の預言が成就した「神の奇跡」と捉え、約束の地パレスチナのユダヤ化こそキリスト再臨の準備と信じる。

その宗教観に立てば、占領地へのユダヤ人入植を押し進めるネタニヤフ首相は神意の体現者と映る。彼を助け、イスラエルと敵対するイランに圧力を加えることが福音派の支持を固めることになる。

選挙戦の終盤になり、トランプ大統領がイスラエルとアラブ首長国連邦（UAE）やバーレーンの国交正常化を仲介したり、イラン制裁の強化に動いたりした背景には、内政上の思惑がある。

だが、当のネタニヤフ氏は政権交代を見据えているらしい。トランプ氏のお墨付きを得た占領地ヨルダン川西岸の併合を見送ったのは、併合に反対するバイデン民主党候補への配慮との見方を示した。

イスラエルとの「特別の関係」に支えられてきた米中東外交だが、若者を中心とする民主党左派の間では、入植・併合への反発からパレスチナ支持者の方が多いという。変化の予兆をうかがわせる興味深い指摘だった。

共同通信社編集委員　川北　省吾

リチャード・コート　駐日オーストラリア大使　9月30日
蜜月の日豪、安保関係も強化



着任から4年、退任を前にしたリチャード・コート大使の会見は、緊密さを増す日豪関係を象徴する内容となった。

特別な経験として、2018年の安倍晋三首相とモリソン首相の豪北部ダーウィンでの会談への同行を挙げた。太平洋戦争中の1942年、日本軍はダーウィンを空爆した。「犠牲を振り返り、域内平和のため、たゆまない努力をする場に立ち会えた」と振り返った。かつての敵国同士の和解を確認する歴史的な訪問だった。

安全保障面での関係の強化も強調した。東シナ海や日本海では18年から豪軍が北朝鮮による違法活動の監視で協力。豪州の森林火災の消火活動には自衛隊が今年、輸送機を派遣した。「安全、安定、繁栄するインド太平洋を築く双方の強い決意の表れだ」と述べた。念頭には、南シナ海での軍事拠点化を進める中国がある。豪州はその動きが周辺の太平洋の島国に及ぶことも懸念する。

豪州と中国の関係は、新型コロナウイルスの中国の初期対応などを巡って悪化している。このことを問われ、「ときどき緊張が走ることはある」「中国は域内で自己主張を強めつつある」と認めつつも、最大の貿易相手国だとして「違いを乗り越えるために建設的な対応が重要だ。日中関係に似ている」と答えた。

日豪関係のもう一つの柱である経済分野では、水素などクリーンエネルギーでの協力に期待を示した。

友好関係の多様さも紹介した。107もの姉妹都市交流があり、豪州人の間では、日本語学習熱が高く、日本は北海道へのスキーなど旅行先として人気だ。

両国の間では、自衛隊と豪軍が互いの国を訓練や災害支援などで円滑に訪れるようにする協定の交渉が進む。合意すれば、両国関係を一段と深める協定の基盤に、こんな信頼と交流の積み重ねがあることは確かだろう。

朝日新聞社シドニー支局長　小暮　哲夫



左から石破、菅、岸田の各候補

自民党総裁選 立候補者討論会

日本記者クラブ主催の自民党総裁選立候補者による討論会が9月12日に行われた。この討論会は今回で11回目となり、第1部「候補者の主張と討論」、第2部「企画委員による代表質問」の2部構成で行った。第1部司会担当の伊藤雅之委員、代表質問の橋本五郎委員、菅氏の出身地・秋田魁新報の小松嘉和記者に寄稿していただいた。

■対立構図、政策優先順位が鮮明に

第1部のみどころは、菅氏が「外交」で石破氏を批判し、岸田氏が「女性活躍」で石破氏を質したことと、誰も「憲法」を取り上げなかったことだろう。2位争いを含めた対立の構図や政策の優先順位を浮き彫りにした形だ。テーマを明示して、候補に選択してもらった効果もあったと思う。

質問者に回答に対する反論を与える1往復半方式も、言いっ放しを避ける意味は、少なからずあったと感じている。告示から時間を置いた時期の開催も、それまでの議論を整理して深め、足らざるを補う日本記者クラブの持ち味が生かせたと考える。

第1部について、毎回、方式が違ってわかりにくいと指摘があった。しかし、候補者の数や選挙の構図、時間配分などを考慮しながら、その都度、最適な方法を考えるのが妥当だろう。

「討論」は、相手の言い分を聞き、自らの主張を客観視することで、政策をより精緻にし、説得力を高める。長期政権で、「答弁」は得意な自民党には、「討論力」を磨くことが、求められているのではないだろうか。

第1部司会・NHK解説副委員長
伊藤　雅之





写真㊦＝右から、伊藤、坪井、橋本、坂東、藤井の各企画委員

■石破氏が控室のムードメーカー

直前の控室では、自民党総裁選立候補経験では「先輩格」の石破氏が、ムードメーカーを務めていた。

揮毫の最中に、隣の菅氏に「長官、揮毫はどうですか」と話しかけると、色紙に覆いかぶさるようにして集中していた菅氏は苦笑しながら、「全然ダメ」と一言。

石破氏は、「立候補者の討論会にはもっと遊び心が必要だね」と持論を展開、酒豪といわれる岸田氏に「今度は入場料をとって岸田さんと私で飲み比べ合戦をやりませんか」と持ち掛けると、岸田氏が「面白いですね」と笑いながら応じる場面もあった。

実施要項メモ

▼日時：9月12日（土）13：00～15：10　10階ホール
▼登壇者：石破茂、菅義偉、岸田文雄の各候補（届け出順）▼進行：【第1部】（約50分）＝各候補者が「目指す国家像」についてボードを用いながら主張（持ち時間2分）。その後、候補者同士の討論。相手を指名して質問し、答える形式（持ち時間1分30秒）で3巡行った。【第2部】（約80分）＝企画委員による代表質問。回答時間は原則1分30秒▼総合司会：小栗泉、第1部司会：伊藤雅之、代表質問：橋本五郎、坪井ゆづる、坂東賢治、藤井彰夫の各企画委員▼新型コロナウイルス感染防止対策として記者・関係者の定員は従来の約4割、テレビカメラは5割とし、スチル撮影は東京写真記者協会の8社取材（各社1人）と外国報道協会代表（AFP）に絞った。登壇者の間にアクリル板の設置、登壇者と最前列の間隔を従来より広くとった▼参加者数：会場（スチル、ムービー含む）72人、オンライン104人▼放送はNHKが総合テレビで生中継（ラジオも同様）。民放の中継代表は日本テレビ。動画はニュース映画協会代表（テレビ東京、フジテレビ）、東京写真記者協会代表（産経新聞社）他3社。ラジオは国会放送記者会代表。会員・会員社記者向けにライブ配信を行った。HPに会見詳録あり。クラブ写真撮影：津野義和氏・ガンマ通信

総裁選を振り返って
菅氏圧勝、背後に3つの理由

企画委員　橋本　五郎（読売新聞社特別編集委員）

当欄は自民党総裁選の候補者討論会の主催者として、感想と反省を書くのを恒例としている。しかし、日本記者クラブ会報の発行が討論会の1カ月後になって旧聞に属しかねないと考え、総裁選全般についての私なりの印象を記したいと思う。

自民党総裁選は菅義偉氏が圧勝、菅新内閣も歴代3位という高い支持率で好スタートを切った。45年の政治記者生活で多くの総裁選を見てきたが、これまでにない光景がいくつもあった。それは「永遠のナンバー2」と思われてきた菅氏がなぜ地方票でも他候補を圧倒し、総裁選で圧勝したかをみればよくわかる。

菅氏圧勝の理由をあえて図式化すればこうなる。第一は「安倍辞任効果」である。安倍氏が病状を詳細に説明、辞任せざるを得ないと会見したことが好感を持って迎えられた。内閣支持率は20ポイントも跳ね上がり、これを機に7年8カ月の業績が正当に評価され、それを陰で支えた菅氏の貢献が認められたのである。

第二は、「非常時効果」である。新型コロナウイルス禍という非常時では、実際にコロナ対策などにあたってきた経験者が引き継ぐのが安心できるとみられた。現政権の継承者であることが有利になった。

第三は、「生い立ち効果」とでもいうべきものだ。「雪深い秋田の農家の長男に生まれ」で始まり、いかに苦労してここまで来たかという来歴の吐露は地方出身者には心に響くものだった。私にも秋田の多くの友人から「感動した」という電話があった。田舎から都会に出てきた人々にとっては「戦後日本人の自画像」だったのである。

菅新内閣の支持率の高さは、以上に加えて「生活目線の各論効果」があるだろう。携帯電話料金の引き下げ、不妊治療への公的医療保険適用、縦割り行政の打破、デジタル庁の創設……。首相候補には「ビジョン」の提示が必須だった。しかし、菅氏は違った。具体的であればあるほど成果の如何がすぐわかるというリスクを伴うが、国民にはわかりやすく前向きに映るのだろう。



討論会前に揮毫した色紙を手にする菅氏

■「外交は大丈夫か」に反発

日本記者クラブの討論会で質問者として腐心したのは、政策の違いとともに人柄を浮かび上がらせることだった。そのため候補者の弱点と思われる点にあえて言及した。石破茂氏には「なぜ国会議員の支持が増えるどころか減るのか」、岸田文雄氏には「なぜ世論調査の支持が一桁なのか」、そして菅氏には「外交は大丈夫なのか」だった。

菅氏がほとんどの日米首脳会談に同席したと強調するので、「同席することとトップ同士で交渉するということは違う」と疑問を呈したら、菅氏は「何もしていないと言うんですか。全て事前に相談を受けて会談に出席している」と珍しく気色ばんだ。「外交未知数」の指摘をかなり気にしているなと思わせた。案外克服すべき課題なのかもしれない。

■自身の言葉で語る姿勢を

党内5派閥の支持を取り付けた菅氏は、総裁選での勝利を確信して討論会に臨んだはずだが、失点を恐れてか安全運転に終始した。用意した文面を度々読み上げるようなしぐさは「鉄壁」とされた官房長官会見をほうふつとさせた。守りの安定感を醸した半面、訴求力や迫力を欠いた印象は否めない。今後控える国会審議などでの厳しい論戦を乗り切れるのか、不安を残す形となった。

淡泊な受け答えも目立った。森友問題に関する質問には「今申し上げた通り」、金融政策の問いには「（石破氏と）一緒だ」との一言。一方でふるさと納税の創設やインバウンド拡大などの実績は繰り返しアピールし、実行力を誇示する狙いがうかがえた。こうした話しぶりの変質を国民はどう受け止めただろうか。

首相就任会見では「働く内閣」「規制改革」を強調。行政の縦割り打破を旗印に掲げるだけに、大なたを振るう場面もあろう。だからこそ重要になるのが謙虚で丁寧な説明。国のリーダーとして目指す方向性や将来像を自分の言葉で語る姿勢が求められるはずだ。

秋田魁新報社東京支社編集部長
小松　嘉和

「合流新党」代表選立候補者討論会
消費税、党運営の姿勢で違い

企画委員　川上　高志（共同通信社特別編集委員）


泉健太（左）、枝野幸男の両候補

約7年8カ月という時間は、人の思考をいかに固定化してしまうのか。立憲民主と国民民主両党が合流する新党の代表選討論会に臨む前、分裂した野党が選挙目当てに再結集するだけという意識に私自身もとらわれていた。

だが立民・枝野幸男、国民・泉健太の両氏による討論と質疑は、安倍・長期政権との対比を明確にするもので、政権に対抗する勢力の必要性を確認する討論会になったと思う。

希望の党への参加を巡って2017年に分裂した旧民進党が再結集しただけではないかとの質問に、枝野氏は「綱領を見比べてほしい」と切り返した。民進党までは自己責任を強調する新自由主義的な側面が残っていた。だが、新党の綱領は「新自由主義的な方向は間違っており、それとは違う社会をつくっていくことを明確にしている」と。

自民党の菅義偉新総裁（首相）が「自助、共助、公助」を看板に掲げていることに対しても「政治家が自助と言うのは責任放棄。政治の役割は自助や共助ではどうにもならないときの公助だ」と語気を強めた。

確かに新党の綱領は「熟議を重んずる民主政治」「公文書管理と情報公開を徹底し、透明で公正な信頼される政府」など安倍政治の問題点を突いている。

新型コロナ禍で政治の役割が改めて問われている。自粛生活を強いられ、有権者の目も厳しくなっている。新党の綱領は一定の支持を得るのではないか。しかし、その主張を有権者にどう浸透させ、議席獲得につなげるのか。それが課題だろう。

聞きたいテーマは幅広いが、司会も兼ねた伊藤委員と播摩、元村両委員との分担で、限られた時間内で多くの課題をカバーできた。

2人の違いが表れたのは消費税の扱いだった。泉氏は「インフレ率2％まで」と事実上、半永久的な消費税の凍結を主張。これに対し、枝野氏は「税体系の見直しが必要」と一歩引いた発言で、「目の前の景気刺激策との兼ね合いで税率の引き下げは一定程度視野にある」と含みを持たせた。

枝野氏は「消費税は政治争点化すべきではない」とも強調した。ただ、菅氏が消費税減税を否定する中で、野党が税率引き下げで候補者統一を実現すればインパクトは大きい。衆院選の最大の争点になるのは確実だ。

党運営に関して、泉氏は「風通しの良さ」を求めた。枝野氏は「徹底的に議論をして決まったことに対し、背中から弾を撃つような言動があった」と指摘した。理念・政策にこだわるのは当然だが、細部で対立し、内紛・分裂した過去がある。長期政権の後は政局が荒れるという。結束を保ち、受け皿となり得るのか。新党は早速、正念場に直面する。


左から代表質問を務めた播摩、伊藤（司会も担当）、川上、元村の各企画委員　撮影：全て津野義和氏・ガンマ通信

実施要項メモ

▼日時：9月9日（水）13：00～14：30、10階ホール▼登壇者：泉健太、枝野幸男の両候補（届け出順）▼司会兼代表質問：伊藤雅之企画委員、代表質問：川上高志、播摩卓士、元村有希子の各企画委員▼進行：【第1部】（約45分）各3分で両候補者が所信を述べた後、立候補者同士の討論【第2部】（約45分）企画委員による代表質問▼参加者数：会場（スチル、ムービー含む）68人、オンライン47人▼野党第一党の代表選討論会は11回目▼自民総裁選立候補者討論会と同様、新型コロナ感染防止対策として記者・関係者の定員やテレビカメラの台数を制限、スチル撮影は東京写真記者協会の8社取材、外国報道協会代表に絞った。NHKが生中継。会員・会員社記者向けにライブ配信を行った。

安倍首相電撃辞任

「空白の4時間」に嫌な予感
徹底していた官邸の情報管理

星野　典久（朝日新聞社政治部 首相官邸キャップ）

8月28日、安倍晋三首相（当時）が辞意を表明した。「電撃」とも言われる辞任劇だったが、その予兆はあった。

最初に現れた予兆は同12日。広島の原爆で受けた健康被害をめぐるいわゆる「黒い雨」訴訟について、国や広島県・市が控訴した日だった。安倍氏は首相官邸でぶら下がり取材に応じたが、首相番の記者がいぶかしむ様子で報告してきた。「総理の様子がおかしいんです。歩くスピードが遅いし、声も小さくて聞こえない」。テレビ画面を通しても安倍氏の顔色が冴えないのは明らかだった。

5日後の17日。安倍氏が急きょ慶応大学病院に「日帰り検診」（のちに投薬治療と判明）で訪れ、約7時間半も滞在。24日も同病院に4時間近く滞在したことから、なんらかの治療を受けていると推察した。首相会見が近くセットされるという話も流れていた。一方、取材で聞こえてくるのは、「体調は回復している。会見では新たな新型コロナウイルス対策を発表し、続投を表明する」という情報だった。確かに安倍氏の歩く速度は元に戻り、顔色もよくなっているように見えた。

そして迎えた辞任表明前日の27日夜。配布された翌28日の首相日程を見ると、新型コロナ対応の政府対策本部が午後1時、安倍氏の記者会見が午後5時にセットされていた。これまで対策本部と記者会見は毎回、時間を空けずに行われてきた。この「空白の4時間」に、私は「嫌な予感」を覚えた。その後の取材で、対策本部での首相発言の内容がわかった。ワクチンの確保などを盛り込んだ追加策を明らかにするという。では、なぜわざわざ時間を空けて会見をするのか。「嫌な予感」は強まるばかりだった。

「取材先に顕著な変化」と緊急報告

時計の針が午前0時を回ろうとしていた頃、携帯電話が鳴った。取材先の様子がこれまでと違うという報告だった。「首相は回復している」としながらも、振る舞いや表情に目に見える変化があったという。だが、それだけで特ダネを打つことはできない。その日の当番デスクには「とても嫌な感じ」として自分の見立てを伝えた。与党クラブのキャップ・サブらには、明朝以降、取材先の動きを注視するよう依頼した。辞意表明があるなら、麻生太郎副総理兼財務相や二階俊博幹事長ら政府・与党のキーマンには事前に伝えるはずだ。「空白の4時間」はそのための時間ではないのか。その夜はほとんど眠ることができなかった。

明けて28日朝。朝刊各紙に「辞任へ」の文字はなかったものの、テレビのワイドショーでは政権に近いとされるコメンテーターが「（辞任は）五分五分」と話していた。午前10時半過ぎ、安倍氏は麻生氏と官邸で約30分会談。その時すでに、「嫌な予感」は「確信」になりつつあった。



ぶら下がり取材に応じる安倍首相（当時）（8月12日／千代田区・官邸／朝日新聞社提供）

「動き」の察知の大切さ実感

午後2時前、安倍氏は官邸を出て自民党本部に向かった。同2分、二階氏と面会。その数分後、NHKの速報ニュースがテロップで流れた。取材体制を強化していた私たちもすぐに裏取りをし、速報を打った。

最長首相の電撃辞任という最大級の「ヤマ」。関係者の中には「事前に知っていた」という人もいたが、情報管理は徹底されていた。その中で改めて感じたのは「取材先の動きをよく見る」という基本の大切さだ。特ダネを狙うのは当たり前だが、事前に動きだけでも察知できれば準備ができる。それを実践してくれた同僚たちに心から敬意を表したい。

ほしの・のりひさ▼2005年入社 津総局 名古屋本社社会部を経て10年4月から政治部 17年9月に特別報道部へ異動し加計学園問題を取材 18年4月に政治部に戻り 20年4月から現職

米国　ＢＬＭ運動

黒人への根深い差別を実感
大坂選手の抗議に賞賛の声

猪ノ口　克司朗（テレビ朝日ニューヨーク特派員）

トランプタワーに向かう群衆には、車椅子や松葉杖を抱えながら参加する人たちの姿もあった。７月下旬、ニューヨーク５番街での反人種差別デモ。気温は30度を超えていたが、途中、菓子や水が配られるなど終始平和的な雰囲気が漂っていた。

先頭にいた黒人女性に声を掛けた。「仕事終わりに毎日欠かさず参加している」と笑顔を見せる。人種差別について話を向けると、「私は独身だけど過去には婚約者がいたの」と話し始めた。両親に黒人の男性を紹介したが、父親は頑として「黒人との結婚」を許さなかったという。娘や生まれてくる孫に自分が受けた差別を経験させたくないというのが理由だった。黒人が黒人を否定するという差別の根深さを目の当たりにした瞬間だった。

「警察には絶対抵抗するな」

別の日、ブルックリンで出会ったシングルマザーの黒人女性は、「高校生の息子が外出するたび、無事に帰ってくるよう神に祈っている」と語った。「警察には絶対に抵抗するな」という教育も徹底していると。

容疑者と対峙する警察官に強い権限が与えられているこの国では、拘束時に命を失う危険性もある。罪がなくとも身に危険が及ぶことを想定して生きていかねばならないのだ。



ＢＬＭ運動を取材する筆者。デモには白人の姿もあり人種を超えて抗議は広がっている（7月27日／米・ニューヨーク／テレビ朝日提供）

あまりに多くの黒人が〝丸腰〟の状態で非人道的な扱いを受け、命を落としているという事実。「ブラック・ライブズ・マター（ＢＬＭ）」。その叫びは、「何も命まで奪う必要はないじゃないか」という悲痛な思いから発せられている。

テニスの全米オープンで２度目の優勝を果たした大坂なおみ選手。決勝までに黒人の犠牲者７人の名前が入ったマスクを着けて登場し、人種差別に抗議する強いメッセージを送り続けた。

米メディアの報道も試合に勝つごとに加熱していった。ＮＢＡの選手など多くのアスリートが差別撤廃を訴えているが、彼女への賞賛はかつてないものだった。

テニスは裕福な白人のスポーツ

決勝戦の取材先は、スポーツバーに決めていた。無観客で会場は画にならなかったし、酒も入るバーなら客の本音が聞けるのではと思ったからだ。

まず黒人が多く住むハーレムへ。天気も良く、屋外で大音量を響かせながら大勢がブランチを楽しんでいた。家族との時間を大切にするアメリカの週末のワンシーンだ。

広い中庭に大画面を備えたバーに目を付けた。ところが店員の黒人女性はＮＢＡからテニスにチャンネルを変えてはくれない。

それもそのはず、周りの公園では子どもたちが皆バスケットコートで走り回っていた。奇麗に整えられた芝の上で競技するテニスは多くの黒人には馴染みがない。裕福な白人のスポーツなのだ。

急いでミッドタウンにあるアイリッシュ系のバーに転戦。すると白人と黒人のグループがビールを片手にテニスを観戦していた。

大坂選手が優勝を決めた瞬間、白人男性は、「保守的なテニス界で黒人の人種差別に抗議したことに刺激を受けた」と興奮して話してくれた。多様性を認め合うことの大切さも語ってくれた。

試合後のインタビューで、「この問題を多くの人に知ってもらい、議論してほしい」と語った大坂選手。黒人の「命」に関わる差別が、現実にここにあるのだということが、多くの人の胸に届いたに違いない。私自身もしっかりと受け止めた。

いのくち・かつじろう▼２００５年入社
社会部　報道ステーション　外報部など
を経て　19年７月から現職

消毒、隔離、監視…徹底した防疫 日本の「緩さ」に不安抱く

中国のコロナ水際対策体験

坂本　信博（西日本新聞社中国総局長）

好きな古典落語に「一眼国」という演目がある。見せ物小屋を営む男が、一つ目小僧を探して「一つ目の国」へ旅に出る。やっと一つ目の子を見つけて喜んでいたら、住民たちに捕まって大騒ぎに。「こいつは珍しい。二つ目だ。見せ物小屋に売り飛ばせ」というオチが付く。

中国総局長の辞令を受け、8月中旬に成田発大連行きの空路で中国に入った。成田空港では、入管当局や航空会社の職員は新型コロナウイルス対策でマスクを着用してはいたが、普段通りの制服姿。一方、乗客の大半を占める中国人乗客には白い防護服姿が多く、奇異に感じた。

ところが大連空港に着くと、当局も航空会社も職員は全員、白い防護服姿。かつて取材した宮崎での鳥インフルエンザ発生時や福島の原発事故被災地の光景がよみがえった。一眼国さながらに、中国の人々の目には普段着の日本人乗客が異様に映っただろう。

飛行機を降りると、腕に整理番号を書いたシールを貼られ、二重三重の問診とPCR検査を受けた。検査が終わるたび、机や室内に消毒液を散布するなど防疫を徹底していた。

入国審査にたどり着くまでに1時間。手荷物受取所でスーツケースを受け取ると、消毒液を噴霧されたらしく、びっしょりぬれていた。

1日2回、「微信」で検温報告

その後、14日間の隔離生活を送るホテルを振り分けられ、バスに乗った。座席と運転席の間にはビニールの幕があった。気温29度。感染予防で空調は使えず窓も開けては駄目という。車内は蒸し風呂状態。水際対策の徹底ぶりに、60代の日本人男性がつぶやいた。「日本の対策は大丈夫でしょうか。危ないエリアから安全なエリアに来た気さえします」

ホテルでは、防護服姿の医療スタッフから体温計を渡され、中国の通信アプリ「微信」のグループチャットへの登録を指示された。1日2回、朝夕に検温結果を報告しなければならないほか「諸連絡はすべて微信で行う」という。問答無用。全員がスマホを持っている前提だった。

ホテル入り口に「汚染区」の張り紙

フロントで14日泊分の宿泊費を払うと、スタッフから言われた。「指示があるまで部屋から外に出ないで。警察が24時間監視しています。見つけたら隔離を延長します」

ホテルの入り口には「汚染区」という張り紙があり、大理石の廊下は足を滑らせそうなほど消毒液でぬれていた。エレベーターにはボタンを押すための使い捨てティッシュが備え付けられている。同じ水際でも、出国前日に泊まった成田のホテルとの違いを感じた。「ひょっとしたら日本の緩さは世界の非常識かも…」

PCR検査をホテルの庭で受ける時だけ部屋を出ることができた。不便だったが、何かあればスタッフがすぐに微信で対応してくれた。1日3回の配給弁当は予想以上においしく、飲み物や料理の追加注文もできた。

隔離生活を終えて思うのは、日本で隔離生活を送る訪日外国人への対応だ。14日間で日本のファンになる外国人が増えてくれればいいが―。

こんな体験を、西日本新聞が読者からの調査依頼に応える「あなたの特命取材班」のスピンオフ企画「あなたの特派員」として連載したところ、好評をいただいた。記事は中国のウェブメディアに「無断転載」され、思わぬ反響を呼んだ。その結果、中国紙のインタビューを受けることになり、また驚いた。日本人記者の感想が新鮮に映ったのだろう。

一眼国と二眼国のように近くて遠い日本と中国。色眼鏡は外しつつ、ローカルメディアの特派員として見聞きした実相を読者に伝えたい。



大連空港に着いて飛行機を降りるとまず、乗客の腕に情報管理のための整理番号が貼られた（8月11日／中国遼寧省大連市／筆者提供）

さかもと・のぶひろ▼1999年入社　長崎総局　東京支社　社会部デスク　クロスメディア報道部シニアマネージャーなどを経て　2020年8月から現職

競泳・池江璃花子選手

「第二の水泳人生の始まりです」
白血病克服、594日ぶり奇跡の復帰

太田　倫（報知新聞社運動第二部）

「奇跡」という言葉を軽々しく使いたくないと思っている。が、スタート台に立っている池江璃花子を見て、他にふさわしい言葉がなかなか見当たらなかった。これが奇跡でなくて何だというのか…。

8月29日。辰巳国際水泳場で行われた東京都特別水泳大会で、池江は594日ぶりにレースに復帰した。「自分のことだけど感動した。第二の水泳人生の始まりです」。白血病に打ち勝って、プールに帰ってきたのだ。

入院で体重10㌔以上減少

かつての鍛え上げられた逆三角形の体形ではない。約10カ月に及ぶ入院生活のさなかに、10㌔以上も体重は落ちた。本格的に練習を再開してから約3カ月ほどしかたっておらず、肩幅や腕の細さに闘病の跡が見て取れた。

選んだレースは、女子50㍍自由形。小学6年生のとき、初めて全国レベルの大会で優勝した思い出の種目でもある。タイムは26秒32。自らが保持する日本記録24秒21には及ばないが、泳いだグループでは1位、全体でも55人中5位に入り、改めてその非凡さを示した。「今回は楽しむことが一番。本当に楽しんで泳ぐことができた」。当初、周囲の想定は年明けや来春に大会に出られれば…というものだったそうである。

私が池江を取材するようになったのは、東京五輪担当になった18年からだった。初めて取材した大会は短水路で、彼女は恐るべきことに、出場した4レース全てで日本新記録を出した。水泳仲間からは「バケモンか」と突っ込まれ、「地球外生命体」とまで言われていた。無垢の魂が駆け上がっていくさまに、こういう選手が五輪でも表彰台の真ん中にたどり着くのだな、と確信していた。



レース後笑顔を見せる池江選手（8月29日／辰巳国際水泳場／東京都江東区／報知新聞社提供）

2019年2月12日は忘れられない。「池江白血病」の一報に、膝から崩れ落ちるような感覚を味わった。一取材者に過ぎない私でもそうなのだから、本人、ご家族がどれほどの思いなのか、と、様々な感情が渦を巻いた。無力感にも襲われた。「思ってたより数千倍しんどい」「最後まで負けたくない」。入院中の池江が時折SNSなどで発信するメッセージに触れながら、「何年後でもいいから、復帰戦だけは必ず見届けたい」という思いが徐々に芽生えてきた。

極端に言えば、それまでの彼女への関心は「ゴール」にあった。記事の軸となるのはタイムや順位だからである。しかし、8月29日は違った。スタート台にたどり着いたという事実、過程こそが、何よりも尊い。コロナの影響もあって現場に立ち入ることはかなわず、リモート観戦ではあったが、その瞬間を目撃できたことに、素直に感謝した。

「負けたくない」が原動力に

復帰への道のりを知る周囲の人は「病気に打ち勝つためには気持ちが本当に大事なんだなと思う」と話す。3月に、退院後初めてプールに入ったときでさえ、「このくらいの泳ぎならこのくらいのタイム」と、頭の中でストップウオッチが作動していたという。普段練習を共にするチームメートも証言する。「入院して、治療して、普通ならみんなと一緒に練習することもできないと思う。でも、負けて悔しいという思いを持って練習している。普通の人じゃ考えられない思考を持っているんです」

レースの最中、池江は一瞬だけ周りを横目で見た。追い上げに気付き、「負けたくない」との思いがかすめた。病が侵すことができなかったのは、何よりも、そのスイマーとしての本能だった。

おおた・りん▼2000年入社　整理部などを経て08年からプロ野球担当　ロッテ　横浜　巨人などの球団や13年WBC　18年から五輪担当　野球デスクを経て

新・列島報告㊾　北海道
「核のごみ」処分場問題

「パンドラの箱」開ける2町村

住民反発の寿都、誘致目指す神恵内

安本　浩之
（北海道新聞社報道センター部次長）

北海道が「核のごみ」問題で揺れている。札幌市から車で約3時間かかる日本海沿岸の寿都町と神恵内村が高レベル放射性廃棄物（核のごみ）の最終処分場選定の第1段階となる文献調査へ10月8日にも応募表明する見通しとなった。どちらも漁業を基盤に発展してきたが、人口減は止まらない。今年に入り、コロナ禍が追い打ちをかけ、地域振興の切り札として「パンドラの箱」を開ける覚悟を決めた。

口火を切ったのは寿都町だ。片岡春雄町長（71）は8月12日、北海道新聞の取材に対し、応募検討を表明した。文献調査と言えば、2002年から国が調査地公募を始めたが応募したのは07年の高知県東洋町のみで、同町は町内外の反対でその後、撤回した。国が17年に処分場適地を示す科学的特性マップを公表した後では、応募検討表明は寿都町が国内初となる。

旭川市出身の片岡町長は民間企業を経て、26歳で役場入り。01年に初当選し、現在5期目だ。職員時代の1989年、町独自の風力発電を設置し、売電による歳入確保を試みる。東日本大震災後の12年、再生可能エネルギー固定価格買い取り制度（FIT）が導入されたこともあり、現在は11基の風車で年約7億円の歳入がある。私も18年まで寿都町を管轄する岩内支局長として接したが、行政運営を「ビジネス」と語るようにドライな発言と実行力は印象的だった。バッシング覚悟での応募検討は町長の個性に負うところが大きい。


住民説明会を終え、記者団の取材に答える片岡町長（9月15日／寿都町樽岸地区／北海道新聞社提供）

■「巨額の交付金」が動機

最大の動機は国の交付金による財源確保だ。町の人口は現在約2900人だが、20年後に2千人を切るとの予測もある。本年度の一般会計予算は総額51億円。売電収入は年々減少する見通しで、行政サービス維持のために文献調査と第2段階の概要調査で最大90億円も支給される交付金に目を付けた。

もう一つの理由は「核のごみ」の議論の喚起だ。寿都町は北海道電力泊原発（泊村）から30キロ圏の緊急時防護措置区域にあたり、片岡町長も原発への理解は深い。北海道新聞が2018年に行った泊原発周辺20市町村の首長アンケートでは、泊村長のほかに唯一、再稼働に賛成した。片岡町長は核のごみの議論にも一石を投じて国にアピールし、寿都で計画される洋上風力発電計画への支援を狙うが、処分場誘致までは望んでいないのが本音だ。

ただ、町内では「文献調査受け入れは処分場建設につながる」と反発の声は強い。片岡町長は「肌感覚で住民の過半数は賛成」として、応募に踏み切るが、反対派住民はリコール（解職請求）もちらつかせる。

■知事の反対姿勢も手詰まりか

9月11日に北海道新聞は寿都から約40キロ離れた神恵内村の商工会が、村の応募を求める請願を村議会に提出したと報じた。人口約820人の神恵内村は泊原発の立地自治体の一つ。原発や関連産業で働く村民も多く、9月下旬に行われた住民説明会では応募への賛成意見が相次いだ。神恵内では主目的は交付金ではなく、処分場誘致そのものだ。長年検討してきたという商工会幹部は「ほしいのは金ではなく処分場誘致による人と雇用」と言い切る。

国は両町村の動きを歓迎し、住民説明会にも参加している。北海道には全国で唯一、核のごみの持ち込みを「受け入れ難い」とする核抜き条例があるが、強制力はなく、応募に反対姿勢を示す鈴木直道知事も手詰まり感は否めない。原子力政策の転換点であり、公正な報道を続けたい。

（10月5日記）

やすもと・ひろゆき▼1996年入社
社会部　報道本部　岩内支局長などを経て　2018年7月から現職

「唯一の好機」、92年の日露領土交渉
「秘密提案」書かずに悔恨残る

名越　健郎



なごし・けんろう
1953年岡山県生まれ　76年時事通信社入社　バンコク　モスクワ　ワシントン　2度目のモスクワ各支局　外信部長　仙台支社長などを経て　2011年退社　現在　拓殖大学海外事情研究所教授

安倍晋三首相が悲願とした北方領土問題の解決は、首相の病気退陣により最終的に破綻した。安倍政権は戦後最もロシアに友好的な政権だったが、ロシアには通用しなかった。最後は「領土割譲禁止」を含む憲法改正という強烈なしっぺ返しを受けた。

「私とウラジーミルの手で必ず平和条約を締結する」などと期待をあおった首相の責任は重いが、交渉が難航した最大の理由はプーチン政権がすっかり国粋主義外交に転換したことにあろう。

◆冷戦後、領土割譲容認の動きが

筆者は、ソ連による北方領土占拠後の75年間で、日本が3島以上を獲得する形で領土問題を解決できた機会は、1992年の一時期しかなかったとみている。91年末にソ連邦が崩壊し、新生ロシアがスターリン外交を否定し、北大西洋条約機構（NATO）加盟まで検討していたあの時期である。

当時、ロシア経済は大混乱し、市場経済移行で大量の外貨を必要としていた。一方の日本は「冷戦の勝者」といわれ、国内総生産（GDP）は世界の16％を占め、現在の中国の水準だった。92年の日本のGDPはロシアの42倍で、ロシア社会には最先端を行く日本の援助を受けられるなら、領土割譲は仕方がないという雰囲気があった。

急進改革派のエリツィン大統領は、「戦勝国が敗戦国の領土を奪うのは間違いだ」「北方領土問題を必ず解決する」と公言していた。「敗戦国には領土を要求する権利はない」とする現在のラブロフ外相とは正反対だった。

だが、この千載一遇の好機に、日本外交は動かなかった。91年から93年までに、ゴルバチョフ、エリツィンと首脳が3度続けて訪日したが、日本の首相は1度もモスクワに行かなかった。「4島返還」に固執して、多角的な外交を展開せず、圧倒的な経済力を外交カードに利用できなかった。

プーチン政権の強硬外交に手を焼く外務省ロシア・スクールの中には、「なぜあの時、一気に解決しなかったのか」と担当者を批判する人が少なくない。当時の総理が「宮沢喜一」ではなく、「安倍晋三」だったなら、平和条約が締結されていたかもしれない。

ソ連崩壊前後に時事通信記者としてモスクワに駐在していた筆者も、あの時もっと日露関係の取材・報道をしておけば……と悔やむことがある。

92年が絶好のチャンスだったが、交渉のモメンタムは長く続かなかった。市場経済改革がハイパーインフレを招いて国民の不満を高め、4月ごろから議会保守派のエリツィン攻撃が拡大した。エリツィン外交も次第に保守化し、9月の訪日をドタキャンしたことで、交渉機運は遠のいた。

◆外相来日時の秘密協議情報入手

この間、筆者は4月ごろ、「コズイレフ外相とクナーゼ外務次官が3月に訪日した際、渡辺美智雄外相に領土で秘密提案を行った。歯舞・色丹返還と国後・択捉の帰属協議を別個に行うというものだ」との情報をモスクワで聞いたことがある。

ニュースソースは民間の情報通なので、ロシア外務省と日本大使館の幹部に当てたところ、ともに「そんな話は聞いたこともないし、あり得ない」という反応だった。最高機密だったので、一握りの高官しか知らなかったようだ。

やがて大統領府と議会の権力闘争が激化し、そちらの取材に没頭するようになった。当時、ロシア公文書

館で機密文書が公開されるようになり、筆者はその調査にも集中した。秘密提案の情報は時事通信の霞クラブに丸投げしたが、東京でもつかめなかったらしい。

コズイレフ外相と日本通のクナーゼ外務次官が渡辺外相とのさしの会談で非公式提案をしたことはその後も噂には上ったが、最初に報道したのは、２０００年ごろの朝日新聞だった。

歯舞・色丹の引き渡し協議、国後・択捉の帰属協議を同時並行で進め、決着後に平和条約を締結するというクナーゼ提案は、学者時代からの持論に沿うもので、「非公式」とはいえ、ソ連・ロシア側が過去75年間で提示した最も妥協的な解決案だった。しかし、日本側は一部の外務省幹部だけで検討し、「４島返還では



ロシアを訪問した際に、コズイレフ・ロシア外相と握手する渡辺美智雄外相（右）（1992年5月/モスクワ/AFP時事）

ない」として拒否した。対案を出して本格交渉に入ろうともしなかった。

◆モスクワでクナーゼ氏を取材

03年から2度目のモスクワ勤務をした際、外務省を辞めたクナーゼ氏と秘密提案について話す機会があった。クナーゼ氏は「56年宣言で約束した歯舞、色丹はともかく、国後、択捉を交渉なしに引き渡すことはできない。あれがぎりぎりのロシアの譲歩だった」「その後、渡辺外相が訪露した際、空港から車に同乗し、『これを拒否すると、交渉は後退する』『私のクビも危くなる』と説得したが、渡辺外相は『4島の日本帰属を確認するなら、実際の返還は柔軟に対応する』と答えるだけだった」と話していた。

日本側から無視され、ロシアの保守派から国賊呼ばわりされたクナーゼ氏は次第に孤立無援となった。事実上失脚するが、あれほど勇気を持って日露交渉に尽力したのに気の毒だった。

◆４島固執で敗北した日本外交

筆者は昨年、『北方領土はなぜ還ってこないのか』（海竜社）という本を出版する際、当時の日本外務省関係者らに取材したが、ある幹部は「あと一歩で4島に手が届くと考え、舞い上がっていた。経験則から、最高首脳が決断すれば動くと思っていた。国会で何十回も４島返還要求決議が採択されており、官僚がそれを覆すことはできない。ロシアの内政悪化が誤算だった」と話していた。しかし、外交は結果が全てであり、今日の2島も返さないロシアの出方をみれば、日本の対露外交は結果的に大失敗だった。

クナーゼ提案に沿って本格協議を行っていれば、歯舞、色丹は間違いなく日本領となる。プーチン政権のように「2島の主権をどうするか規定がない」といったクレームもなかった。国後、択捉については、双方の主張が対立し、なかなかまとまらないだろうが、双方の信頼感や真摯な共同作業があれば、島を分割する妥協的な解決策が生まれたかもしれない。つまり、日本が国後、ロシアが択捉を確保するという「３島返還」である。

通常なら、提案を拒否する場合でも対案を示し、妥協点を探るものだが、日本外務省はそれもしなかった。官邸にも事後報告だったらしい。

あの当時、筆者も含め、ロシアの専門家や学者、記者らは、時代を絶好のチャンスとみなし、対露外交で果敢に攻めるべきだという論調を展開しなかった。その後のロシアが、プーチン体制のような保守志向に逆戻りすることを誰も予測できなかった。

その中で、中国専門家の中嶋嶺雄元国際教養大学学長はゴルバチョフ時代から、「歴史的好機が到来した」とし、日本も妥協しながら早急に領土問題を解決し、来るグローバル時代に備えるべきだと主張していた。しかし、「56年宣言に沿ってまず２島を獲得し、残る2島は主権を要求しながら共同開発や買い取り等の道を探る」という中嶋氏の主張は外務省高官から「敗北主義」「２島返還論」と国賊呼ばわりされた。当時の外務省の尺度では、安倍首相も「国賊」となってしまった。

あるロシア専門の学者は筆者に対し、「自分も中嶋さんの意見に同感だったが、中嶋さんが外務省などから攻撃されるのを見て怖くて書けなかった」と回顧していた。それでは、何のためのロシア研究なのかが問われてしまう。

記者を辞めて10年近くたつが、今でも92年の怒濤の時代に「クナーゼ提案」を、誤報を恐れず記事にしておくべきだったと思うことがある。報道しておけば、外務省の情報独占を阻止し、世論に訴えて交渉を後押しできたかもしれないという思いが、悔恨とともによみがえってくる。

私が会ったあの人

ドラマ「大地の子」残留孤児の養父役　朱旭（チュウシュイ）さん
日中の友情と和解の象徴だった

五十嵐　文（読売新聞社）

日本では、本名よりも「『大地の子』の中国人のおとうさん」として親しまれてきた。

山崎豊子さんの同名小説を原作に、１９９５年にＮＨＫで放映された日中共同制作ドラマで、残留孤児の養父役を演じた。丸めがね越しのまなざしに、血のつながらない「我が子」への慈しみがにじみ出るような名演に魅了された。

■「戦後70年」取材で自宅を訪問

実物の朱旭さんに会ったのは２０１５年夏。戦後70年の節目に合わせてインタビューを申し込んだところ、北京市内の自宅マンションに招いてくれた。

１８０㌢（チン）余りの長身痩躯に、漢服風の上着がよく似合う。当時85歳だったが、数多くの舞台や映画、ドラマに出演してきた一流の役者ならではの風格と、笑顔を絶やさぬ気さくな対応は、ドラマの「おとうさん」そのものだった。

居間のソファに並んで腰を下ろし、話を聞いた。８年ぶりに日本を訪れたばかりといい、ドラマで残留孤児を演じた俳優の上川隆也さんらと再会したことや、10年以上前の朱さんのサインを持って駆けつけた日本人ファンとの交流を楽しげに話してくれた。

戦争に巻き込まれた日中双方の国民の友情と和解を描いた「大地の子」は、朱さん自身の人生とも重なる。

朱さんは満州事変の前年の１９３０年、中国東北部の奉天（現・遼寧省瀋陽）に生まれた。父親は日本の関東軍に砲撃された東北軍にいた。終戦まで戦争を身近に感じて過ごし、「日本人にいい印象は持てなかった」と語った。

80年代に芝居の公演で日本人と共演するようになり、交流を重ねたことで、わだかまりは次第に消えていったという。



北京の自宅でインタビューに応じてくれた朱旭さん（2015年8月／読売新聞社提供）

■日本で残留孤児の孤独に触れる

日本で実際に残留孤児に会いに行き、日本社会に溶け込めない孤独に触れた。養父役を演じつつ、「日本人も軍国主義の被害者だ」という周恩来元首相の言葉をかみしめた。朱さん自身の実感が込められていたからこそ、みる人の感情を強く揺さぶったのだろう。

朱さんに会った前後の日中関係は、尖閣諸島を巡る対立から、改善に向けてようやく動き出していた。その後、首脳レベルの「日中新時代」宣言とは裏腹に、米中対立や、中国の強引な香港政策で、協力の機運は失われつつある。

朱さんに教わった言葉がある。「己所不欲勿施于人」。自分がされたくないことを他人にするなという趣旨の論語の一節だ。日本など列強に蹂躙された中国が、周囲に同じことをすることはないからと「心配無用」と朱さんは言った。

中国は変わったのか、それとも今の統治が異質なのか。朱さんに再び会って聞いてみたかったのに、２年前に旅立ってしまった。

朱さんの出演作では、中国映画「変臉」（１９９５年公開）もいい。一子相伝の秘技を伝えるために孤児を買った大道芸人が、欺きや過ちに翻弄されつつ、古い殻から自分を解き放つ。職人気質の役柄と朱さんが一体に思え、何度みても涙が止まらない。

これから先、「大地の子」のおとうさんと言われてもピンと来ない日本人は増えていく。友好のシンボルが去った空間を、一切の異論を力で封じ込める大国・中国のイメージが塗り替えていく。共通の物語の担い手と共感を失いつつある日中は、これまで以上に厳しい時代に入った。

（いがらし・あや　国際部長）

次号は鴨下ひろみさん（フジテレビ）にバトンが渡ります。

「戦後75年　いま想うこと」

人生最大の事件、満州での戦争体験

藤原　作弥

「戦後75年　いま想うこと」というタイトルを頂戴して深い感慨に耽った。私の人生航路は今、傘寿プラス・アルファ〝アラハン（100歳）時代〟の四半世紀を振り返り、①戦争②悪疫（コロナ禍）③相次ぐ自然災害―という人類史サイクルの三大エポックに遭遇してジャーナリスト生活を回顧する機会を得たからである。

75年前の今頃、私は旧満州・安東（現・中国遼寧省丹東）で敗戦国民の難民生活を送っていた。それまで住んでいたのはソ連国境近くの僻地、満蒙草原の興安街（現・中国内モンゴル自治区ウランホト）。1945年8月9日払暁、中立条約を破り突然進出してきたソ連軍団の攻撃から九死に一生を得て、脱出してきたばかりだった。

同地での約1年半の難民生活の間、飢餓と悪疫チフス、ソ連兵や暴徒の襲撃には悩まされた。闇市をタバコ売り行商で徘徊する間、目撃するのは強盗、殺人、暴行、売春、麻薬…など旧約聖書の「ソドムとゴモラ」のような大人の悪徳の世界。後に不良少年になるわけである。

考えてみると、そうした放浪・遍歴体験は藤原家の血筋なのかもしれない。秋田県、田沢湖の畔、戊辰戦争の戦場で生を享けた祖父は、角館の漢学塾から盛岡、仙台へと青雲の志を抱いて出奔。仙台の「河北新報」主筆・編集局長時代は日本各地を漫遊、朝鮮、清国、台湾なども巡り旅行記を書いたという。言語学者の父は、ウラル・アルタイ語系民族の民間伝承を調査研究するフィールド・ワーカー。終戦にならなければ北朝鮮、満蒙歴訪のあと同語族系の国の、トルコ、フィンランド、ハンガリーまで足を延ばしていただろう。

私が新聞記者を志したのも〝藤原家3代〟の〈放浪癖〉と〈好奇心〉のDNAのなせる業か。ニュースの卸売業の通信社からスタートして、論文、エッセーを経てノンフィクション作家との二足の草鞋を履くようになった。その後、テレビ・新聞も含め各種メディアに関与できたのは、ジャーナリスト冥利に尽きる（日銀入りは蛇足？）。

冒頭で、①戦争②悪疫③災害を歴史サイクルの三大転換要因と指摘したが、中でも満州での戦争体験はわが人生でも最大の事件であり教訓でもあった。その体験は『満州、少国民の戦記』（新潮社）に記したが、同書の執筆・取材過程で知った満蒙地在住同胞が遭遇した惨劇は、私の生き方を大きく変えた。

私たち一家は万が一の場合に備えて興安街東部在住の日本人約1200名と共に避難する計画だったが、ソ連軍進攻の翌日、8月10日に父が奉職していた軍官学校の家族避難団が急きょ組成され、最後の貨物列車で現地を脱出した。

しかし、残された日本人約1200名は徒歩で隣町を目指して避難中、8月14日正午近く、ソ連戦車軍団に発見されラマ教寺院・葛根廟の丘の中腹で襲撃された。大半が虐殺され集団自殺をも含む一大悲劇が「葛根廟事件」である。

その事実を30年も経過してから平和の国・日本で知った時、私は地に伏し、体を震わせて慟哭した。クラス30名のうち3分の2は草原を赤い血で染めた。友人を失った悲しさと自分だけが生き残ったという後ろめたさから、私は改めてあの昭和の戦争とは何だったのか、を考え始めた。戦争と平和に翻弄された昭和の大女優・李香蘭の伝記を執筆したのも昭和史探訪の一環である。

◇

閑話休題。私の現役記者時代、時事通信本社は東京・内幸町の日比谷公会堂（市政会館）内にあり、道を隔てた向かいの日本記者クラブに連日のように出入りしていた。解説委員時代は企画委員を長く務め、さまざまな記者会見や講演会を企画・立案した。

私自身も日銀副総裁時代に講演させていただいたが、最もありがたかったのは「葛根廟事件命日会」（大島満吉会長）の仲間と共に事件について2度講演し、ドキュメンタリー・フィルム「葛根廟事件の証言」（田上龍一監督）の上映会を開催してもらったことである。お陰で満州三大悲劇の同事件は世の中に広く知られるようになった。また、毎年、祥月命日（8月14日）に東京・目黒の五百羅漢寺で開かれる「命日会」には関心を寄せる参加者が増えた。

こうした私の人生晩年のボランティア活動「戦争の語り部」までサポートしてくれた日本記者クラブに、戦後75年の機会に改めて感謝する次第である。

（功労会員　時事通信出身）

＊戦後75年の節目に戦争体験をもつ藤原作弥功労会員にご寄稿いただきました。

重要になる科学記者の役割



武藤　香織
東京大学医科学研究所
公共政策研究分野教授

第４回／９月16日
出席：24人

■コロナ報道で「新しい様式」を

武藤さんは政府専門家会議の中で、専門家の政治への関わり方や社会への発信方法、発信によって生じる差別などを分析・提言してきた。科学と社会のつなぎ役を目指す私たちと、志は同じだと感じた。

専門家会議のあり方には「本来は政府が述べる内容も提言に混在しており後悔がある。厚労省には、専門家会議で発信してもらえばいいという姿勢があった」と率直に振り返った。

メディアへの問題提起も。新型コロナウイルスの感染者の個人情報を詳細に報じたことや、感染防止策として次亜塩素酸噴霧器の学校での使用など過剰な防衛を美談にしたことを指摘。「新しい報道様式を考えてほしい」と投げかけた。

ワクチン開発などなお国民の関心は高い。早く、大きく報じたいという思いは、当然ある。だが、抑制が必要な場面もある。正解は無いからこそ、武藤さんの問いかけを常に意識の中に置きたい。

東京新聞社会部　森　耕一

土曜記者ゼミ

調査報道編③

９・19／会場24人、ネット45人

長谷川智一　共同通信札幌支社編集部
次長／室矢英樹　朝日新聞大阪本社社会部

■関電問題取材、２氏が報告

「結局は日々の取材の積み重ね」。関西電力役員らの金品受領問題を追った長谷川氏の助言は明快だった。調査報道と聞くと壮大なスケールを想像して尻込みしそうだが、実際には登記簿や工事経歴書などの公表資料を読み込み、丹念な地取りから問題の輪郭をつかんだという。端緒となった「雲をつかむような話」を寄せたのは旧知の取材先。地道な努力を怠らず、人とのつながりを大切にする基本姿勢を改めて見直す機会となった。

続いて報告した室矢氏も、取材の要諦を「諦めずに数をこなすこと」と強調。東京電力福島第１原発事故から間もなく10年という大局的な視点を意識することで、業界にいまだ巣くう闇を際立たせた。印象に残ったのは「面白いと感じるのは若手もベテランも関係ない」という一言。日常から感覚を研ぎ澄ましてテーマを掘り起こしたい。

デーリー東北新聞社東京支社編集部
藤野　武

IT編②

９・26／会場13人、ネット35人

川上貴之　時事通信社／宇佐美理　日本テレビ／小倉誼之　朝日新聞社／白井政行　朝日新聞メディアプロダクション／田中孝憲　報知新聞社

■無料データ可視化サービスを利用

データの可視化ができる無料のウエブサービス「Flourish」の使い方を学んだ。２枚の写真を比較する「フォトスライダー」や、複数の棒グラフが時系列に沿って動く「バーチャートレース」、「動く折れ線グラフ」、「地図」など、代表的なツールを実践形式で学べたのは有意義だった。番組制作のコストも大幅に削減できそうだ。

朝日新聞メディアプロダクションのクリエイティブチームによる「フォトグラメトリー」（さまざまな角度から撮影した画像を解析・統合して３ＤＣＧモデルを作成する手法）の講義も興味深かった。

ＩＴ技術の進化により誰でも手軽にデータの可視化ができるようになった。しかし、ジャーナリスト的な視点が不可欠なことは変わらない。「重要なのはそこにどんなデータを入れるかだ」という講師の言葉が、最も本質を捉えていた。

ＮＨＫ報道局社会番組部ディレクター
新井　直之

記者ゼミ「重要になる科学記者の役割」と土曜記者ゼミに参加希望の方は事務局・河野（電話０３－３５０３－２７６４、メールkono@jnpc.or.jp）までお問い合わせください。ただし、参加は現役記者のみです。

■会議報告

●第４１６回会報委員会

（９・２　大会議室）

10月号の編集について協議し、「ワーキングプレス」「新列島」のテーマを決めた。

出席　乾委員長、齊藤、曽我部、桑田、高橋、中村、迫田、長竹、西井の各委員。

●第５０９回企画委員会

（９・８　10階ホール）

次の党首討論会の開催方法などについて議論し、今後のゲスト候補についても意見交換した。

出席　西村委員長、坪井、村山、坂東、磯崎、橋本、猪熊、藤井（彰）、藤井（一）、藤賀、森田、杉田、川上、小林、斉川、井上、宮内、伊藤、竹田、出川、川戸、播摩、小栗、福田、倉重、川村、内城の各委員。

●第５１７回会員資格委員会（書面）

10月１日付入退会を審議、理事会に答申した。

試写室
(9.16)

靴ひも



見どころは二つある

見どころは二つ、と思う。

一つは、人は一人では生きられないということの再認識である。当たり前のようなことであるが、残念ながら私たちは時々忘れる。映画は発達障害のある38歳の息子と老いた父親の関係の成長を追う。息子が父親に対し「あなたは僕を恥じている」と言い放つ敵対的関係から、やがて「父さん」と親しく呼ぶ家族関係になり、最後は父親を「友達」とも呼ぶ深い相互理解の関係に到達する。見る者は、真の優しさ、人と人との関係はかくあるべきと教え諭されるようでもある。

監督のヤコブ・ゴールドヴァッサー氏は、社会問題を描いて著名であり、この映画も知的障害のある息子が自分の腎臓を父親に提供しようとした実話を聞いてつくったという。映画の運びや結末は明かすまい。

二つめの見どころは、中東特派員だった私がぜひ見てほしいと思うところでもあるが、それはイスラエルの民衆の姿である。主人公のささやかに自動車修理を営むユダヤ人父子を取り巻いて、浅黒い肌のソーシャルワーカーはモロッコ系、褐色の食堂店員はエチオピア系、低く見られた医師はアラブ系。そこにはユダヤ人だけではなく多種多様な人々が生き、多くは低い階層をなしている。めかした初デートの店の卓にテーブルクロスはなく、背伸びして家を持てば高額のローンに苦しむ。真新しい床板に赤ワインをこぼして染みを付けまいと懸命にぬぐう姿の哀れ。イスラエルの映画館の観客は笑いながら泣いたのかもしれない。

イスラエルという国は国際的には残念ながら好かれているとは言い難い。私たちの知るイスラエルはパレスチナを占領し空爆する国である。しかし映画が見せてくれるのはイスラエルの政治でなく民衆そのものである。国際政治を深く知ろうとするなら、その国の普通の人々を忘れてはなるまい。

東京新聞参与　深田　実

10月17日(土)より、シアター・イメージフォーラムほか全国順次公開　配給：マジックアワー
©Transfax Film Productions

マイBOOKマイPR

『ラジオで伝えた「世の中の仕組み」』

加倉井　弘（NHK出身）

大事なことを短く書きました

太平洋戦争の主戦場はほとんど海外だった。そこで失われた日本兵の命は、病気と飢餓によるものが圧倒的に多かったことをご存じだろうか。共産党の支配する中国も含めて世界各国がマクロ経済学で動いているが、赤字国債はいくら増えても大丈夫なのか。去年、日本は国際捕鯨委員会から脱退したが、日本外交は「日本の安全と生存の維持」をきちんと支えているのか。

そんなことをこの本に書いてみた。



東京図書出版
880円

『反日VS反韓―対立激化の深層』

黒田　勝弘（産経新聞社ソウル駐在客員論説委員）

日本人にも対韓被害感情がある

最悪といわれる日韓関係の背景には日本側での韓国に対する「もういい加減にしてくれ」という反韓・嫌韓感情がある。これは安倍政権時代に広がったが安倍政権がもたらしたものではない。韓国における「目に余る反日現象」のせいである。それを「歴史まみれの韓国」と「歴史離れの日本」で解くとともに、韓国における〝対日歴史修正主義〟の深刻さとして紹介した。映画「パラサイト」をめぐる大誤解についても指摘させてもらった。



角川新書
990円

『盗まれたエジプト文明　ナイル5000年の墓泥棒』

篠田　航一（毎日新聞社前カイロ支局長）

取材対象としての古代エジプト

「古代エジプト史は面白いけど、専門家の本は難しい。読みやすい本ありませんか」。カイロ特派員時代、何人かに同じことを聞かれ、ちょうど自分も興味のあった「略奪と盗掘の歴史」を書いてみようと思い立った。考古学者、元テロリスト、そして「現役」の墓泥棒らを取材し、現場を訪れ、寄り道エピソードも交えて出来上がったのがこの本だ。盗む者と追う者の攻防はスリリング。「呪い」って本当にあるの？

詳しくは本書で。



文藝春秋
968円

新しい個人D会員

川村 晃司



1973年NET（現テレビ朝日）入社。政治部、カイロ支局長、ニューヨーク支局兼メキシコ支局長など。帰国後はコメンテーターとして政治・外交の解説を担当。2020年8月退社。

先輩に現場レポートを通じて歴史の目撃者たれ、と言われながら古希を迎えた。さらに克己してメディアウオッチに励み、生涯一記者の心意気。

杉山 正隆



1990年毎日新聞入社。横浜支局、政治部、HIV/AIDS取材班などを経て94年退社。その後、杉山歯科医院副院長を務めながら現在に至るまで、日本ジャーナリスト会議運営委員。

歯科医師とジャーナリストの２足のわらじ。AIDS等の感染症と危機管理が専門です。日本の医療と報道を治療していければな、と考えています。

和田 圭



1975年フジテレビ入社。「FNNモーニングコール」キャスター、政治記者、解説委員、編集委員、コメンテーター、番組プロデューサー・編集長などを務め2017年退社。

子どもが受験期のD会員というのも珍しいのかと（笑）。取材はいまだ独自に継続しております。安いラウンジをマメに使わせていただきます。

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■日本エッセイスト・クラブ賞贈呈式

第68回の贈呈式が行われた。受賞作には岩瀬達哉氏の『裁判官も人である　良心と組織の狭間で』（講談社）と上野誠氏の『万葉学者、墓をしまい母を送る』（同）が選ばれ、両氏に賞状と賞金が贈られた。1953年に創設された同賞の受賞者は今年度で189人。（9.7　会見場）

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・ＯＢらが政治家を招き、定期的に勉強会を開催している。９月は中谷元・元防衛大臣（9.2）、野田聖子・元総務大臣（9.9）、福田康夫・元総理大臣（9.23）、林芳正・元文科大臣（9.30）を招いた。

■新聞通信調査会例会

９月の例会は共同通信の名取裕樹特別編集委員が「どうなる東京五輪・パラリンピック」をテーマに講演した。コロナ感染拡大防止のため事前申し込み制、定員20人で開催した。（9.25　会見場）

■日本外交協会９月例会

外務省の市川恵一・北米局長が11月３日投票の米大統領選の見通しとともに、米社会の行方や今後の日米関係のあり方などについて講演した。（9.29　10階ホール）

会報委員から

「全てのひとが障害者になった」

パラリンピック開会１年前の特集で、競泳の富田宇宙選手の言葉が強く印象に残った。新型コロナで練習が制限されていることについて問われ、日常が失われるという経験はすでにしてきたので、と答えたのだ。10代半ばで病気ゆえ視力を失い、宇宙飛行士になる夢を絶たれ一時期は好きなスポーツを断念した。パラ競泳の金メダル候補と言われるようになるまで、どれだけの厳しい日々と向き合ってきたのだろう。

緊急事態宣言のなかで外出自粛となった際に、全てのひとが障害者になった、と語ったのは熊谷晋一郎医師。脳性まひの車いすユーザーの小児科医で、東大で障害研究をしている。障害を、「医学モデル」ではなく、社会の側の障害で不自由さを強いられた結果が障害者であるとするのが「社会モデル」の考え方。外に出られない辛さを多くのひとが感じた際に、移動が困難で外出が制限されていた重度障害者と変わらなくなった、との認識から発せられた言葉だ。彼らは自宅からリモートで仕事をすることをどれだけ望んでいたことか。いまやそれが、多くのひとの日常となりつつある。

新型コロナ対策のなかでの映画鑑賞が快適なことに気づいてしまったのは、私のささやかな体験である。前後左右が一席ずつ空いていることで、隣に知らない男性が座ることがない。上映間近の暗いなかで隣に突然知らない男性に座られたときの緊張感は、なかなかうまく説明できないが、一人で映画をみることをためらってきた女性たちには共感されると思う。

新型コロナがもたらした社会がこの先どういう形になってゆくのか。ニューノーマルという言い方もあるが、そもそもノーマルという言葉は少数者排除、差別的な感覚をはらむ。今こそ、多様な生き方が認められる社会に変わることができるか問われているように思う。

ＮＨＫ出身　迫田　朋子

レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話　和食 3503-2723　洋食 3503-2766・2731

和食　神無月懐石（11/4まで）

先付：紅葉なます、春日子鯛の手毬寿司　お椀：土瓶蒸し、ハモ、鶏など　造り：鮪、紅葉鯛、帆立　焼物：甘鯛丹波焼き、きくらげ利久煮など　蒸物：萩蒸し太刀魚など　揚物：馬鈴薯巣籠、海老蓑揚げなど　食事：蟹雑炊　水菓子：季節の果物（5,500円）

（板長：内海圭史）

洋食　季節のおすすめコース（10/31まで）

豚ヒレ肉とキノコのエスカベッシュ　サラダ仕立て、人参のポタージュ　クリームスープ、真鯛と帆立貝　天使海老のブイヤベース風、シュークリームと林檎のコンポート、パン、コーヒー（4,400円）。ランチ、ディナー（土曜日はランチのみ９階レストラン）ともにご利用いただけます。

会員限定「会食ディナーコース」（10/30まで）

10月限定の会員向け特別コースです。メニューは下記の通りです。

本日の前菜　サラダ仕立て、コンソメまたはクリームポタージュ、本日のおすすめ魚料理、厳選牛フィレ肉のステーキ、本日のデザート、パン、コーヒーまたは紅茶（5,500円）。

窓側の席（４名様まで）をご利用いただけます。

（シェフ：佐藤和治）

貸室利用のドリンク297円（税込み）に

貸室利用時のソフトドリンク、コーヒー、紅茶の値段が一律297円（税込み）になりました。ご理解のほどよろしくお願いいたします。なお、ラウンジでの料金に変更はありません。

HP更新情報　https://www.jnpc.or.jp/

■会見詳録　会見の文字記録

注目の会見や資料価値の高い研究会の全文をPDF版で掲載しています。新規に下記をアップしました。

●自民党総裁選立候補者討論会（9.12）

◇ウェブ限定エッセー「私の取材余話」に投稿を

会員の皆さんに今でも心に残る取材の思い出話をご寄稿いただいております。

最近では、８月に死去された柴田鉄治さん（朝日新聞出身）が、1963年に作家の北杜夫さんと一緒にオホーツク海の流氷調査に行った時の思い出話を掲載しています。投稿ご希望の方は本庄までお問い合わせください。（電話：03-3503-2754、メール：honjo@jnpc.or.jp）

お詫びして訂正します　９月号18㌻に記載した「日本ジャーナリズム懇話会」は「日本ジャーナリスト懇話会」の誤りでした。

日本新聞博物館　企画展「石川文洋写真展」

報道写真家・石川文洋さんは2018年７月から19年６月までの11カ月間で北海道から沖縄県を踏破。その旅路で撮影した写真約120枚を展示しています。東日本大震災や熊本地震などの被災地、米軍基地問題で揺れる辺野古や普天間などを撮影しました。12月20日（日）まで。コロナ感染防止のため予約制。

横浜市中区日本大通11　横浜情報文化センター
電話：045-661-2040　http://newspark.jp

ラウンジ利用時の署名、消毒等のお願い

新型コロナウイルス感染防止対策のため、クラブのラウンジを利用される際に、入室簿の記入と手指消毒、マスクの着用をお願いしています。ご協力をよろしくお願いします。

栗田格さん（ガンマ通信）が死去

長年、クラブ主催の会見や党首討論会を“公式カメラマン”として撮影してくれた報道写真家の栗田格さんが９月27日に死去されました。享年81。

栗田さんは1977年にフランスのガンマ通信社の東京支局長としてクラブに入会、2018年に体調を崩されて退会するまで41年間会員でした。会報委員も79年～ 81年、93年～ 95年と２度、お務めいただきました。

ミッテラン、鄧小平、ワレサ、サッチャー、マンデラなど栗田さんが撮影したVIPの多数の写真が会報の紙面を彩り、ラウンジに今も飾られています。長身でにぎやかな栗田さんはよく事務局へ立ち寄ってくださり、職員に撮影秘話など楽しいおしゃべりをしてくださいました。

ご冥福を心からお祈りいたします。　（本庄）

■訃報　岸田郁弘・元時事通信常務取締役が９月８日、死去されました。享年75。クラブの理事を2006年７月から08年７月までお務めいただきました。ご冥福をお祈りいたします。

今後の行事予定（10/6現在）

20㈫	15：00 ～ 16：00　９階会見場 「よみがえる羅城門」発表会見　松浦晃一郎「明日の京都」会長（元ユネスコ事務局長）
30㈮	18：30 ～ 19：45　10階ホール 試写会「空に聞く」 東日本大震災の後、約３年半にわたり岩手県の「陸前高田災害ＦＭ」のパーソナリティーを務めた女性を追ったドキュメンタリー。

クラブの電話　ダイヤルイン

●和食レストラン（9階）……☎3503-2723　●会員事務……☎3503-2727
●洋食レストラン（10階）……☎3503-2766　●経　　理……☎3503-2728
●貸室予約、宴会打ち合わせ…☎3503-2724　●クラブ行事への申し込み…☎3503-2722
●受　　付……☎3503-2721　●会見申し込みアドレス…kaiken@jnpc.or.jp

会員現況　●法人会員：131社　●基本会員：728人　●個人会員：1,203人　●法人・個人賛助会員：55社・121人　●特別賛助会員：103人　●名誉・功労会員：11人　●学生会員：70人　計：186社・2,236人

会報委員会

委員長＝乾　正人
委　員＝神田　俊英　桑田　広久　齊藤　信宏　迫田　朋子　曽我部　桂　高橋　誠　中村　直樹　長竹　孝夫　西井　泰之　渡辺　昌己
（事務局：本庄五月　杉本翔一）

☎03-3503-2754　FAX 03-3503-7271

写真回廊

撮影：木口（きぐち）　慎子（しんこ）（東京新聞写真部）



本を選ぶかのようにレトルトカレーを選ぶ人たち　（8月25日、東京都調布市の北野エース調布パルコ店）

本棚に並ぶ「フクロの味」

ナポレオンが遠征のさい食料の保存方法を懸賞募集したのがきっかけで、缶詰の製法が生み出された。缶詰に代わる加工食品として、米陸軍が開発したのがレトルト食品だ。日本では一般国民に爆発的に広がった。軍需を民生に転用するのはお手の物。なにせオランダ陸軍の背嚢（はいのう）「ランセル」を小学生に背負わせてランドセルにしてしまうお国柄だ。

レトルトとは加圧釜のことである。オランダ語で、本来は先が折れ曲がったガラス製の実験器具を指す。錬金術師が使ったというから何やら怪しい。ともあれ加圧釜を使って殺菌した袋詰め食品を、すべからくレトルト食品と呼ぶ。

レトルト食品の半数を占めるのがカレーだ。日本初のレトルト食品は１９６８年、大塚食品の「ボンカレー」だった。日本式カレーの三種の神器、タマネギとジャガイモ、ニンジンを今なお入れ、王道を歩む。登場から半世紀を超えた。

家庭用のレトルトカレーは２０１７年度、カレールウを市場規模で逆転した。震災の備蓄でおいしさが再認識され、ブランド牛など「ご当地カレー」が増えた。家族が同じ味を楽しむのでなく、それぞれが好みで選ぶようになった反映でもある。「おふくろの味」から「袋の味」へ。

それにしてもレトルト食品を本に見立てるとは、なかなかのアイデアだ。しかもテーマが「カレー（華麗）なる本棚」ときた。ぜひ見たいと思い、この写真が撮られた東京・調布市の売り場に行くと、北海道から沖縄まで３５０種がズラリと並び圧巻だ。文字通り食指が動く。

でも不満が残る、本は試読できるが、レトルトは試食できない。本は何度も読めるが、レトルトは１回切りで、次はまた買わなければならない。そうか、そういえば…ここで出自の錬金術が頭をかすめたのだった。

（伊藤　千尋）